芥沢遺跡

―― 諏訪南インター林間工業団地上水道施設用地
に係わる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ――

1990

茅野市教育委員会

芥沢遺跡

――― 諏訪南インター林間工業団地上水道施設用地
に係わる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ―――

1990

茅野市教育委員会

序　　文

このたびの芥沢遺跡の発掘調査は、諏訪南インター林間工業団地上水道施設建設に伴い、長野県土地開発公社からの委託を受け、茅野市教育委員会が実施したものであります。

芥沢遺跡は古くより知られています。考古学的調査は昭和28年に藤森栄一・戸沢充則両氏により行われ、縄文時代早期末から前期初頭に亘る貴重な遺物と共に、竪穴住居址が1軒検出されています。これらの考古学的成果は該期を研究する上に貴重なものであります。

このたびの発掘調査は64㎡と遺跡全体の面積からすると微々たるものですが、多数の縄文時代早期末から前期初頭の遺物と、近世の遺構が発見され、芥沢遺跡に新たな知見が加えられました。この詳細については本書に記されていますが、それらの学術的成果が今までの考古学的成果と共に、これからの金沢地区の歴史の研究に裨益するところとなれば幸いであります。芥沢遺跡は入笠山麓に位置し、縄文時代早期末の集落址として重要で、また、諏訪盆地と山梨方面や伊那谷と八ヶ岳山麓とを結ぶ交通上の中継点となるような重要な役割を果たしていたことが明らかになった調査でありました。

終わりに、今回現場での発掘から遺物整理作業、そして報告書の刊行まで尽力いただいた調査団の関係者に深く感謝申し上げる次第であります。

平成2年1月

茅野市教育委員会

教育長　両角　昭二

例　　言

1．本書は、茅野市金沢諏訪南インター林間工業団地上水道施設建設に係わる長野県茅野市芥沢遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は長野県土地開発公社からの委託を受け、茅野市教育委員会が金沢芥沢遺跡調査団を設置し行った。（名簿は別掲）

3．発掘調査は平成元年6月21日から6月26日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は平成元年6月27日から9月まで茅野市尖石考古館において行った。

4．発掘現場における記録は、守矢昌文、矢嶋恵美子、武居八千代が行った。遺物整理は、上記3名のほか関喜子、原敏江、小松とよみが行った。

5．出土品、諸記録は茅野市尖石考古館で保管している。

6．本書の原稿は鵜飼と守矢で分担し、執筆の分担は次のとおりである。第Ⅰ章～第Ⅴ章　守矢昌文、第Ⅵ章　鵜飼幸雄

目　　次

序　文

例　言

第Ⅰ章　調査経緯……1

第1節　調査にいたるまでの経過……1

第2節　発掘調査の経過……1

第Ⅱ章　遺跡概観……1

第1節　遺跡の位置と環境……1

第Ⅲ章　検出された遺構……4

第1節　遺跡の層序……4

第2節　近世の遺構……4

第Ⅳ章　検出された遺物……6

第1節　縄文時代の遺物……6

第2節　中世以降の遺物……15

第Ⅴ章　調査の成果と課題……16

第1節　芥沢遺跡出土の縄文時代早期末から前期初頭の土器群について……16

第Ⅵ章　結　　語……19

第Ⅰ章　調査経緯

第1節　調査にいたるまでの経過

茅野市金沢諏訪南インター林間工業団地用上水道施設建設予定地内の芥沢遺跡の保護について、茅野市工業振興課、茅野市教育委員会の2者で現地協議がなされた。その結果を踏まえ、長野県商工部振興課より保護措置について協議書が提出された。本遺跡の保護については、長野県土地開発公社からの委託費により、茅野市教育委員会が主体となり、42㎡以上を300,000円で調査を行うという調査計画に基づき、平成元年6月に金沢芥沢遺跡発掘調査団を設置し、6月21日より発掘調査に入った。

第2節　発掘調査の経過

発掘調査は上水道施設用地、金沢1,602番地1を対象に行われた。

調査区は、上水道を埋設する道路敷地内に限定されるため、道路センターを基線として、2×2mのグリッドを設定した。

調査は6月21日から行われ、A・B－1～5グリッドの表土剝ぎ作業を開始する。各グリッド共に桑等による撹乱が著しい。A－1・2グリッドに集石、A－3からB－3グリッドに横走するように溝址が検出される。

6月22日、A・B－6グリッドまで調査区を拡大する。溝址、集石の清掃作業に入る。A・B－6グリッドより縄文早期末・前期初頭の土器群の出土が著しいために、A・B－7～8グリッドへ調査を拡大する。

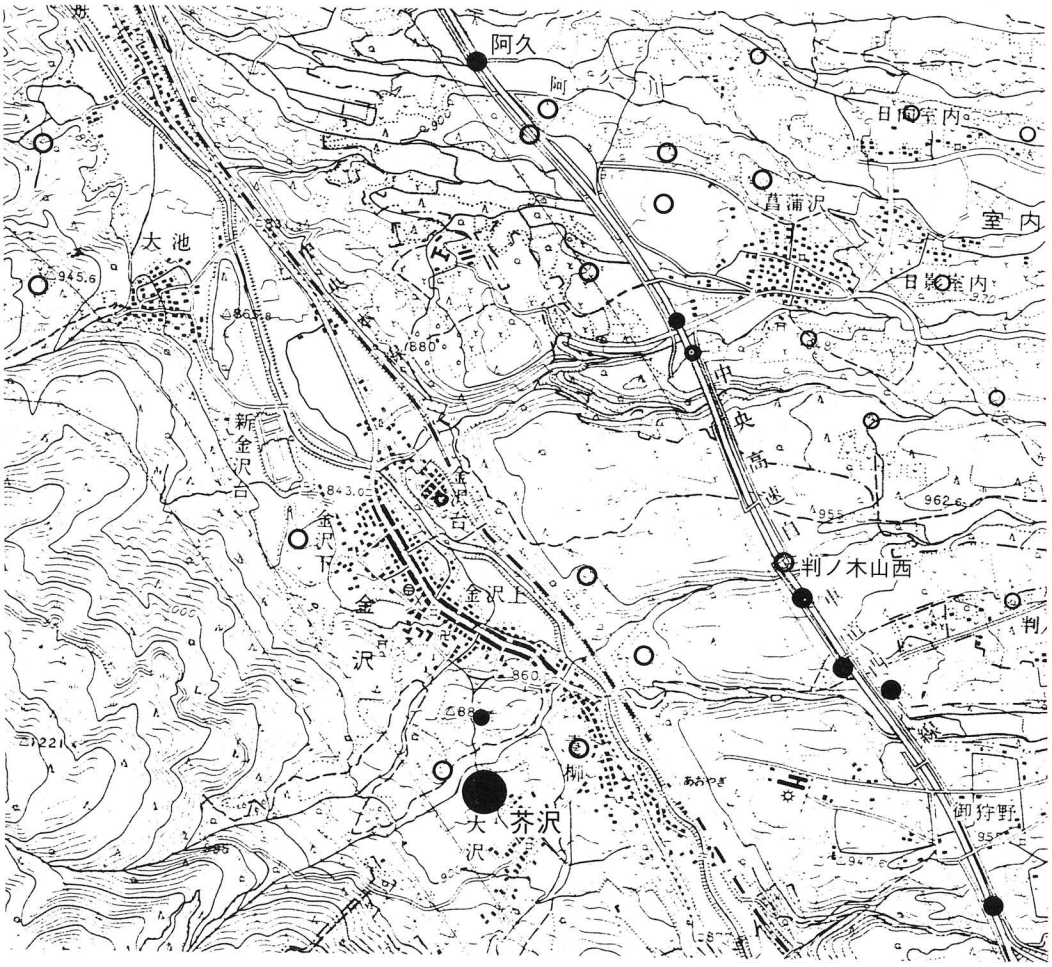
6月26日拡張部の調査と遺構の測量に入る。調査区の西側範囲は耕作等による撹乱が著しいため遺構、遺物等の検出ができず、本日で調査を終了する。

第Ⅱ章　遺跡概観

第1節　遺跡の位置と環境

芥沢遺跡は、山梨方面へ通ずる国道20号線沿いの集落金沢の西側丘陵上に位置する。

遺跡の立地する丘陵は、入笠山系を水源とする大沢川と金川との間には、緩やかな傾斜をもつ丘陵地帯が形成されている。この丘陵上は金川と中野沢川により、更に小さな丘陵に分断されている。丘陵南側には大沢区の集落が位置し、遺跡はこの集落の北側に位置する。遺跡の立地する



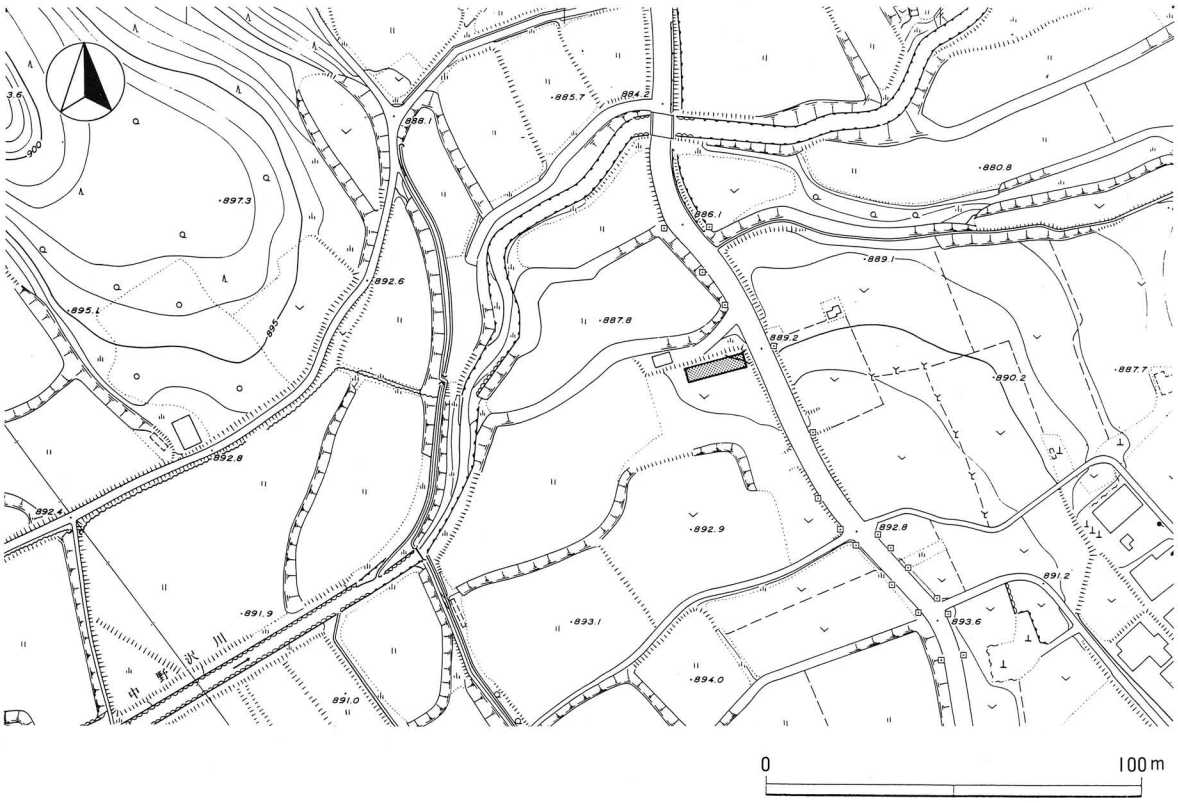
第１図　遺跡位置図（1/25,000）●早期末～前期初頭 ○縄文時代遺跡

丘陵は割合平坦で標高892mである。丘陵上は畑に、低地は水田と利用されている。

本遺跡は、昭和28年に藤森栄一氏、戸沢充則氏らにより遺跡沿いの狭い範囲を対象に小発掘が試みられ、方形プランを呈する竪穴住居址のコーナー部分の検出がされ、縄文早期末から前期初頭の土器が出土している。この調査により検出された遺物について長崎元廣氏等により再確認がなされ（長崎他、1983)、隆帯系と沈線系の両者が存在していることが明確にされている。

遺跡の立地する丘陵は先端部に於いて撓状に広く、遺跡の範囲は東西に約150m、南北に約100mを測り、約15,000㎡が遺跡範囲として捉えることができる。表面採集の結果から、その中でも特に金沢から大沢に至る道路沿いに遺物の散布が顕著で、この範囲に遺跡の中心があるものと思われる。

遺物散布の状況、縄文早期末から近世に亘る遺物が検出されている点などを考慮すると、本遺



第２図　遺跡周辺の地形と発掘区（1/2,000）

跡は割合規模の大きな集落である可能性が高く、その中でも縄文早期末から前期初頭の遺物が多量に採集されていることなどより、この時期の割合大きな規模をもつ集落址が存在したものと考えられる。

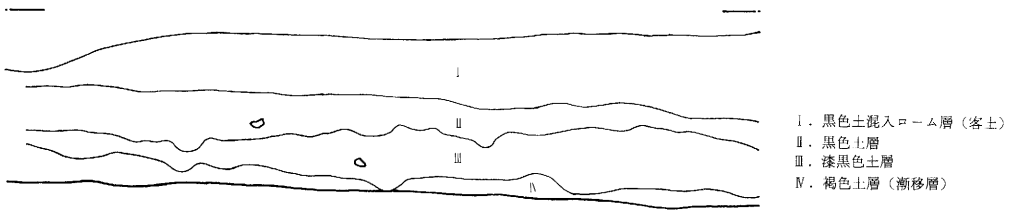
遺跡周辺に位置する縄文早期末から前期初頭の土器が検出されている遺跡は、第１図のとおりで芥沢遺跡と宮川を隔て対峙する八ケ岳山麓末端に数カ所の遺跡が確認されている。これらは全て山麓部を開析して流れる小河川に沿う形で立地している。

この時期の遺跡は山麓部の奥まった位置に形成されている例は少ない傾向が認められており、このような現象が何に起因するのかは興味深い問題である。

また、後章でも述べるが本遺跡内より多量の西山・入笠山系産岩石の砕片、剝片が検出されており、遺跡立地と密接な関係があったものと考えられ、原石産地と生産地を考える上にも本遺跡のあり方は貴重だと言えよう。

第Ⅲ章　検出された遺構

第1節　遺跡の層序



第3図　遺跡の層序（1/40）

遺跡の全体が近代に於ける桑株の抜根等により、かなりの部分が撹乱されている状況にあった。そのため基本層序は最も撹乱の影響の少なかったA・B－6グリッド西壁を対象とした。

第Ⅰ層　黒色土混入ローム層（客土）……埋め土で硬く締っている。

第Ⅱ層　黒色土層……色調は黒茶色を呈し、しまりは良好。内部に炭化物を含有する。溝址1は第Ⅱ層内より掘り込まれている。第Ⅱ層内よりは近世陶磁器片が出土しており、本土層は中世・近世遺物の包含層として捉えることができよう。

第Ⅲ層　漆黒色土層……色調は漆黒色を呈している。土層の状態はフカフカとしており、内部に割合多量の炭化物を含有する。層内より土器片を出土しており、この層が縄文時代の遺物包含層である。

第Ⅳ層　褐色土層（漸移層）……ローム粒子を混入し、色調は褐色を呈する。層上部に若干の土器片が出土する。

全体の土層体積は調査区の北側でローム面まで約1.0m、南側で約0.9mを測り、地山が北側に傾斜していることがわかる。

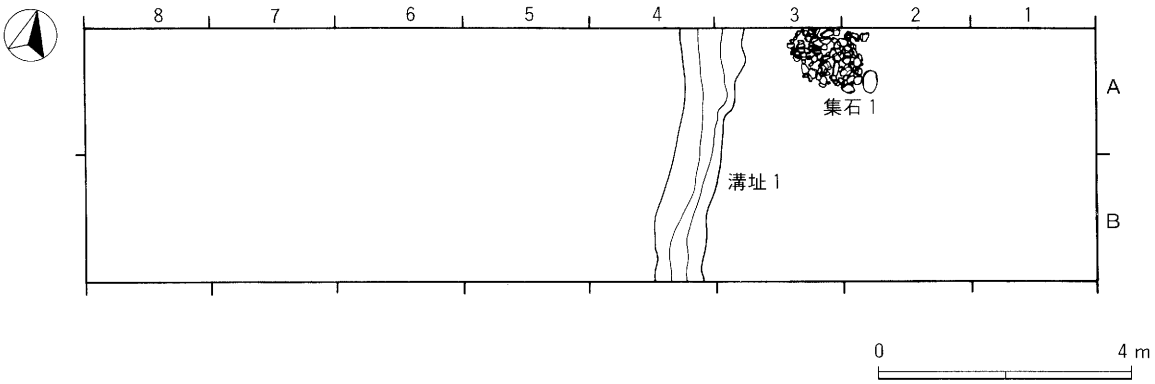
土層の状態より、第Ⅱ層は中世・近世の遺物包含層で、集石1、溝址1などもこの層内より検出が可能であった。第Ⅲ層、第Ⅳ層上部は縄文時代の遺物包含層である。第Ⅲ層内からは縄文中期・早期末～前期初頭の土器群が検出されている。第Ⅳ層上部よりは縄文早期末の条痕文系の土器が検出されており、第Ⅲ層内より検出された土器群と分離することが看取できた。

第2節　近世の遺構

発見された遺構は、集石、溝址がある。これらは遺構に伴出した遺物より近世に帰属するものと捉えることができる。

集石と溝址は割合近接した位置に検出されているが同時性等は明確にできなかった。

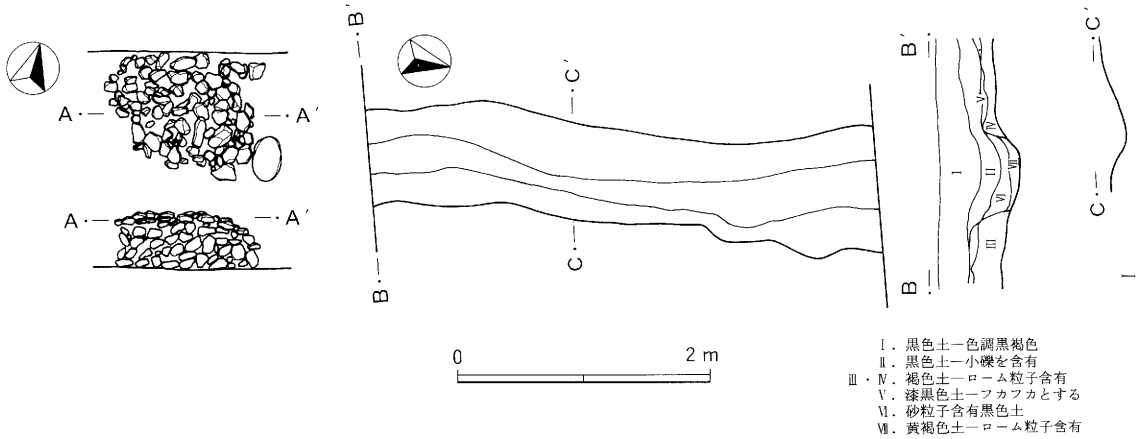
1．第1号集石　A－1グリッドとA－2グリッドの境に礫がケルン状に積み上げられた集石



第４図　発掘区内遺構分布図（1/120）

が検出された。集石を構成する礫は遺跡脇を流れる中野沢川産と思われる。大きさ10～15cmの割合規格のそろった礫が集められている。集石の規模はその北側半分が調査区域外に位置するため、全容を把握することはできなかったが、検出された部分より推察すると、径1.2mの不整円形の平面形を呈するものであろう。集石内には凹石、打製石斧等や、第10図７が集石上面より、２が集石下に検出された。これらの陶磁器により本址は近世に帰属するものである。集石が第Ｉ層より構築されている点、構築されている位置が畑の畦畔付近である点などから考えて本址は畑地造成の際に積み上げられたものであろうと思われる。

２．第１号溝址　Ｂ－３グリッドからＡ－３グリッドにかけて、等高線と直行する形で北側に向う溝が検出された。走行方向はＮ－10°－Ｅ、検出された全長は3.9m、最大幅１m、深さ15cmで、断面形は緩やかな立ち上がりをもち、逆台形状を呈している。溝は第Ｉ層から掘り込まれており、溝の底近くには、砂を混入した土層や礫等が検出され、水の流路であったことが窺えた。溝内から角釘、近世磁器片（第10図６）が出土しており、本址は近世に帰属する遺構と思われる。



第５図　集石１・溝址１（1/60）

第Ⅳ章　検出された遺物

第１節　縄文時代の遺物

１　**縄文土器**（第６図１～25、第７図26～52）

縄文土器の分類について　検出された土器の大半は縄文時代早期末から前期初頭に帰属する土器で全体の99％311点が出土している。中期と思われる土器片が出土しているが無文のため詳細については不明である。縄文早期末～前期初頭の土器を施文方法により大別すると、条痕文系20％、無文32.2％、縄文系8.0％、撚糸文系8.3％、隆帯系2.8％、沈線文系1.0％、薄手指圧痕条痕文系15％、絡条体圧痕文系0.3％が認められ、条痕文系、無文系のものが主体を占める傾向が看取できる。この他に前期中葉の縄文系、中期土器片などが若干ではあるが検出されている。これらの土器の分類は主に時期的なものを群として捉え、施文の方法、系統を類、更に類内で施文状況の差異を種別と分類することにした。

第Ⅰ群（第６図１～25・第７図26～52）縄文時代末から前期最初頭に帰属する土器群である。

第１類Ａ種（第６図１・２）条痕原体は貝殻によると思われる脈状の割合規則正しいものである。表裏に条痕が施文されている。条痕の状態が擦痕状のものもあり、①、②に分類が可能である。①のように明らかに貝殻による条痕が表裏に施されるものと、②のように表裏の条痕が擦痕状となっている。全体的に条痕の状態は軽いもので、部分的に不鮮明な箇所がみられ器面は平滑になっている。胎土中には繊維を含有するが、量的には多くはない。

第１類Ｂ種（第６図３～８）絡条体を原体とする条痕が表裏に施文されるもので、鮮明な条痕をもつもの①と、不鮮明な擦痕状のもの②に分類することが可能である。これらの種の土器は、概してＡ種に比べ器面に凹凸が見られ、特に②に於ては指圧整形によると思われる凹凸を残すものが多数見られた。

第１類Ｃ種（第６図９～12）貝殻を原体とする条痕が表面にだけ施文されており、その状況により明瞭なもの①と、不明瞭なもの②に分けられる。本種はＡ・Ｂ種に比べ割合多量の繊維を胎土中に含有する傾向を示す。

第１類Ｄ種（第６図13～21）絡条体を原体とする条痕が表面だけに施文されており、その状況が明瞭なもの①と不明瞭で軽い擦痕状のもの②がある。①の場合文様構成が矢羽根状を呈する意図的な構成を持つのに対し、②の場合は不規則な条痕の単位が短いものがほとんどである。胎土中に含有する繊維はⅠ群中で最も多く、繊維痕が器面に顕著に現れているものなどもある。裏面の整形なども雑で、指圧整形による凹凸が見られる。

第２類（第６図22）無文の一群である。指頭整形による凹凸を残している。胎土中には割合多量の繊維を含む。全体の傾向として、第１類Ｃ種に類似する。

第３類Ａ種（第６図23）口縁部下にタガ状の貼付隆帯をもつ群で、隆帯上には棒状工具による斜位のキザミがなされている。器面表裏に貝殻条痕が部分的に施文される。

第３類Ｂ種（第６図24）口縁部下にタガ状の貼付隆帯をもつ群であるが、隆帯上にはキザミ等がなされていない。器面表裏に擦痕状の条痕が施される。

第３類Ｃ種（第６図25）口縁部下にタガ状の貼付隆帯をもつ。その状態はＡ種に類似す。隆帯状はヘラ状工具による斜位のキザミがなされている。器面整形は指圧等により、凹凸を残す。Ａ種とＣ種は細かな部分では異なるが、文様の構成や、胎土の状況や含有物などに類似する点を見いだすことができる。

第３類Ａ種（第７図26）口縁部下に断面が台形状を呈する貼付隆帯が弧状構成に施文され隆帯上に斜位、口唇部にもヘラ状工具によるキザミがなされている。胎土中には繊維は混入せず、器厚も第４類程薄手ではないが、中薄手で指圧整形痕を裏面に残しており、凹凸が見られる。

第３類Ｂ種（第７図27）口縁部下に断面方形の貼付隆帯を横位構成をとり、隆帯上は縦位のキザミをもつ。Ａ種に比べ器厚は厚く、整形もナデ整形が行われている。

第４種Ａ種（第７図28～30）器厚が３～４㎜前後と薄手で指頭整形痕を顕著に残し焼成は良好で堅緻な傾向を示すことを特徴とする。施文は低い貼付隆帯が口縁部から胴上半部にかけて付けられ、この上に貝殻条痕がなされている①と、そうでないもの②がみとめられた。

第５類（第７図36～38）第４類に比較すると中薄手の器厚をもち、指圧整形痕もそれほど明瞭ではない。裏面整形が特徴的で指圧整形痕を擦痕状の条痕でナデ消している。また胎土中に石英や長石粒子を混入している。

第６類（第７図39～41）沈線文系の土器群である。口縁部下に不明瞭な結節状沈線による波状沈線を施文している。裏面は貝殻条痕が部分的に施文される。胎土中には微量の繊維を混入するだけである。全体の様相より、39～41は同一個体である。

第７類Ａ種（第７図　42・43）地文に縄文をもち、口縁部は平縁でやや肥厚し、肥厚部下段が稜状になるものである。43の場合、この肥厚部が断面三角形の低い凸帯状となる。地文の胎土中には多量の繊維を含有し、42はナデ整形により、繊維が器面に現れてきてしまっている。縄文は同原体を回転方向の変換により羽状構成を表現している①と、単なる斜状のもの②がみられるが、43は小片で全体構成は羽状となる可能性もある。この他に末端を結節したもの③などがある。これら①～③の縄文施文構成はＢ～Ｄ種にもみられる。

第７類Ｂ種（第７図44）文様構成等はＡ種と類似するが、口縁部形態がＡ種のように平縁ではなく、小突起をもち小波状をなす。口縁部は肥厚化し、有段状となる。胎土中には多量の繊維を含有している。

第７類Ｃ種（第７図45）地文に縄文を施文し、口縁に特徴をもつ。Ｂ種のように小突起を呈し、この波頂下に垂下肥厚部がみられる。

第７類Ｄ種（第７図46）内容的にはＡ～Ｃ種に同様であるが、口縁部が肥厚化せず平縁のもの

である。

第８類（第７図51）ＬＲ・ＲＬ異なる縄文原体を軸巻きにした特徴的な施文法を用いている。

第９類（第７図52）１段の撚糸４本揃え軸巻き原体により施文がなされている。口縁部下にめぐるタガ状の凸帯上には、斜状にある程度の空間を置き、キザミ状の構成に施文がなされる。胴部は口縁部のような規則性は薄れ斜状に密に施文されている。胎土中には多量の繊維が混入している。

このように施文などの状況により多くの類に分類することが可能であるが、大きくその施文状態などを把握すると、条痕文系、薄手系、隆帯系、沈線系、縄文・撚糸文系となる。この土器群の内容は、縄文早期末～前期初頭の土器群を出土する遺跡と類似しているが、絡条体圧痕による土器群が見られない点に特徴がある。

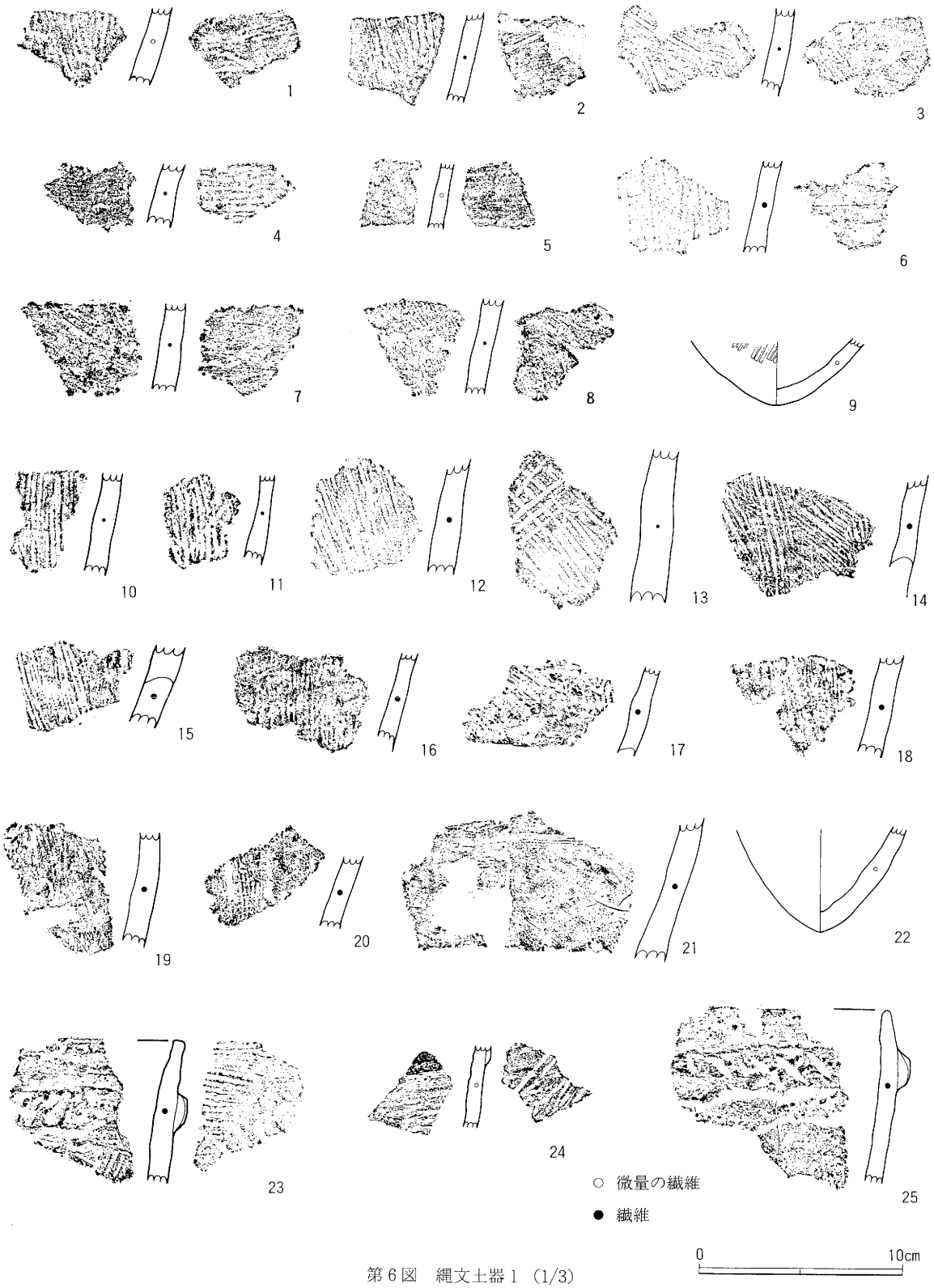
各類についてその特徴より、第３類は神ノ木台式、第４類は塩屋式（木島Ⅲ式）、第６類は下吉井式に比較できよう。

胎土・焼成について　検出された土器の胎土・焼成について概観すると、胎土中に繊維を含有するものと、そうでないものが検出された。繊維を含有するものはその含有量により多量・普通・微量の３者が認められた。第１類Ｄ種、第３類、第７類Ａ・Ｂ・Ｃ種は概して多量の繊維を含有している。このように表裏絡条体条痕文系、隆帯系、縄文系に多量の繊維を混入する傾向は他遺跡より出土する早期末～前期初頭の土器群と類似する。微量の繊維が認められたものは、第６類である。繊維の混入量により焼成の状態に相違がみられ大量に繊維を含有する類は焼成が脆弱な傾向を示している。胎土中には繊維の他に砂粒が含まれており、この砂粒の状況も類により相違が見られる。検出された早期末～前期初頭の土器には白色粒子を含有しているものがほとんどである。白色粒子を詳細に観察するとパミス状の粒子であり、高風呂遺跡等の土器にも同様な混入物が見られた。胎土中に繊維を混入していない土器群は概して長石粒子・石英粒子を混入しており、特に第５類は割合多量の砂粒を混入している。

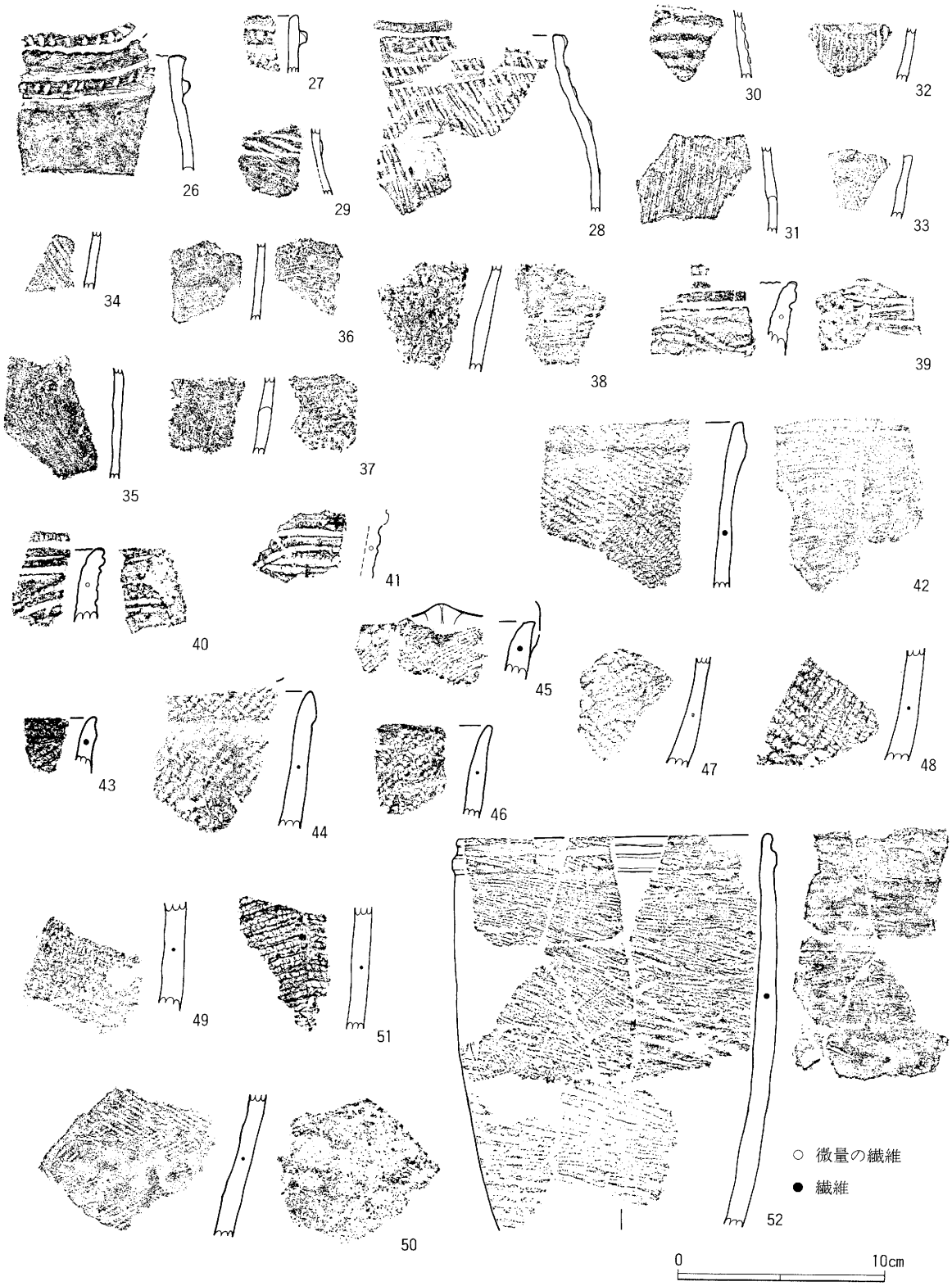
器形等について　器形が判明したものは９・22・52だけである。９・22は尖底部である。尖底の角度は割合鈍角で、やや丸底状に近い形を呈しており、共に類似する器形を呈している。52は破片から器形復元したものである。それによると、平縁をもち口径値が器高値より小さい長胴形の深鉢が想定できた。このような長胴形の器形をもつ同時期の資料は、六反田遺跡（児玉、1983）中道遺跡（児玉、1984）高風呂遺跡（守矢、1986）などに砲弾型を呈する深鉢がみられ52も同様な器形を呈するものであろう。口縁部が判明したものは、14点で、平縁・小波状の２つのタイプが認められた。特に第７類は両者のタイプが認められ、同様なタイプの土器が高風呂遺跡・六反田遺跡、中道遺跡等にみられる。

器厚は１cm前後の厚手、５mm前後の中薄手、３mm前後の薄手があり含繊維土器は概して厚手の土器であり薄手のものは東海系の土器である。

土器の出土分布について　今回検出された土器片は中期を含めると314点である。これらの分


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
○ 微量の繊維
● 繊維
0
10cm

第6図　縄文土器1（1/3）


26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
○ 微量の繊維
● 繊維
0
10cm

第７図　縄文土器２（1/3）

第１表　縄文時代早期末～前期初頭土器観察表

挿図番号	出土地点	分類	部位	施文（A表・B裏）	整形（A表・B裏）	胎土・焼成・色調
第６図１	A－８	Ⅰ－１－A－①	胴部	A．不鮮明な軽い貝殻条痕、斜位・B．軽い貝殻条痕、斜位	A．軽い条痕により平滑・B．軽い条痕により平滑	若干の繊維、白色岩石粉・良好・赤褐色
2	A－８	Ⅰ－１－A－②	胴部	A．不鮮明な貝殻条痕、斜位・B．擦痕状の条痕、斜位	A．軽い条痕により平滑・B．擦痕状のナデ痕	繊維、白色細粒子・良好・黒茶褐色
3	A－８	Ⅰ－１－B－②	胴部	A．明瞭な絡条体条痕、斜位・B．擦痕状の絡条体条痕、斜位	A．条痕部に脈状の凹凸・B．割合平滑	繊維、白色細粒子・褐鉄鉱粒子・良好・赤褐色
4	A－７	Ⅰ－１－B－①	胴部	A．不鮮明な擦痕状の絡条体条痕、横位・B絡条体条痕、横位	A．大きな凹凸	繊維、白色細粒子・良好・黄褐色
5	B－７	Ⅰ－１－B－②	胴部	A．不鮮明な擦痕状の条痕、斜位・B．擦痕状の条痕、横位	A．擦痕状条痕により平滑・B．擦痕状条痕により平滑	微量の繊維、若干の雲母・良好・茶褐色
6	B－７	Ⅰ－１－B－②	胴部	A．絡条体条痕、縦位・B．幅広擦痕状の条痕、横位	A．大きな凹凸・B．若干の凹凸	割合多量の繊維、長石、褐鉄鉱粒子・良好・赤褐色
7	B－８	Ⅰ－１－B－②	胴部	A．擦痕状の条痕、斜位・B．擦痕状の条痕、横位	A．小さな凹凸・B．小さな凹凸	繊維、白色細粒子・良好・茶褐色
8	A－７	Ⅰ－１－B－②	胴部	A．擦痕状の条痕、斜位・B．擦痕状の条痕、斜位	A．大きな凹凸・B．大きな凹凸	繊維、白色細粒子・良好・ハダ色
9	B－８	Ⅰ－１－C－②	底部	A．不鮮明な貝殻条痕、斜位	A．大きな凹凸・B．指圧整形による凹凸	若干の繊維、白色細粒子・良好・赤褐色
10	B－７	Ⅰ－１－C－①	胴部	A．明瞭な貝殻条痕、縦位	A．条痕部に脈状の凹凸・B．指圧による凹凸	繊維、白色岩石粒・良好・茶褐色
11	B－８	Ⅰ－１－C－①	胴部	A．明瞭な貝殻条痕、縦位	A．条痕部に脈状の凹凸・B．若干の指圧整形による凹凸	繊維、白色細粒子・良好・ハダ色
12	B－７	Ⅰ－１－C－①	胴部	A．明瞭な貝殻条痕、斜位	A．小さな凹凸	多量の繊維、白色岩石粒、長石粒・良好・黄茶褐色
13	B－８	Ⅰ－１－D－①	胴部	A．５本１単位の工具による条痕、斜格子状	A．大きな凹凸・B．指圧整形による凹凸	繊維、白色岩石粒・良好・茶褐色
14	B－８	Ⅰ－１－D－①	胴部	A．明瞭な絡条体条痕、不規則な矢羽根状	A．条痕状に脈状の凹凸・B．指圧整形による凹凸	割合多量の繊維、白色、褐鉄鉱粒子・良好・黒茶褐色
15	A－７	Ⅰ－１－D－①	胴部	A．明瞭な絡条体条痕、不規則な矢羽根状？		割合多量の繊維、白色粒子・良好・黒茶褐色
16	B－７	Ⅰ－１－D－②	胴部	A．軽い絡条体条痕、不規則な縦位条痕、単位が短い	A．条痕部が小さな凹凸・B．指圧整形後横ナデ	割合多量の繊維、白色粒子・良好・黒茶褐色
17	B－８	Ⅰ－１－D－②	胴部	A．軽い絡条体条痕、不規則な斜位条痕、単位が短い	A．大きな凹凸・B．若干の指圧整形痕	割合多量の繊維、褐鉄鉱粒子・良好・黒茶褐色
18	A－７	Ⅰ－１－D－②	胴部	A．軽い絡条体条痕、不規則な縦位条痕、単位が短い	A．小さな凹凸・B．小さな凹凸	多量の繊維、長石、白色細粒子・良好・黒茶褐色
19	A－７	Ⅰ－１－D－②	胴部	A．擦痕状の軽い条痕、不規則な縦位、条痕単位が短い	B．指圧整形後縦位ナデ整形	割合多量の繊維、長石、白色細粒子・良好・赤褐色
20	A－２	Ⅰ－１－D－②	胴部	A．擦痕状の軽い条痕、不規則な縦位、条痕単位が短い	A．軽い条痕により平滑	割合多量の繊維、長石、白色細粒子・良好・赤褐色
21	A－７	Ⅰ－１－D－②	胴部	A．擦痕状の条痕、横位と斜位	B．指圧整形後ナデ整形、大きな凹凸	多量の繊維、白色、褐鉄鉱細粒子・良好・黄茶褐色
22	B－８	Ⅰ－２	底部	A．無文	A．指圧整形後ナデ整形・B．指圧整形による凹凸	若干の繊維、白色細粒子、良好・赤褐色
23	B－８	Ⅰ－３－A	口縁部	A．口縁部下にタガ状の貼付隆帯、隆帯断面カマボコ状、隆帯上斜位に棒状工具によるキザミ、地文明瞭な貝殻条痕、斜位・B．明瞭な貝殻条痕、横位	A．条痕後隆帯脇ナデ整形・B．条痕後一部ナデ消	多量の繊維、白色細粒子、褐鉄鉱微粒子、良好、黄茶褐色
24	B－７	Ⅰ－３－B	口縁部？	A．タガ状の貼付隆帯、隆帯断面台形状、地文擦痕状条痕、横位・B．擦痕状条痕、斜位	A．条痕後横ナデ整形	若干の繊維、白色細粒子、褐鉄鉱細粒子・良好堅緻・黒茶褐色
25	A－７	Ⅰ－３－C	口縁部	A．口縁部下にタガ状の貼付隆帯、隆帯断面カマボコ状、隆帯上斜位にヘラ切り	A．雑なナデ整形・B．指圧整形後ナデ整形	多量の繊維、白色細粒子、褐鉄鉱粒子・良好・黒茶褐色
第７図26	A－８	Ⅰ－３－A	口縁部	A．口縁部下に弧状構成に貼付隆帯、隆帯連結部は口縁が小波状、隆帯断面台形状、隆帯上斜位にヘラ切り、口唇部キザミ	A．隆帯脇強ナデ整形、指圧整形後ナデ整形で割合平滑・B．横位指圧整形痕数段、小さな凹凸	雲母、石英、長石粒子・良好堅緻・赤茶褐色
27	B－８	Ⅰ－３－B	口縁部	A．口縁部下に細いタガ状の貼付隆帯、隆帯上縦位キザミ、隆帯断面方形	A．ナデ整形・B．ナデ整形	白色細粒子・良好・赤褐色

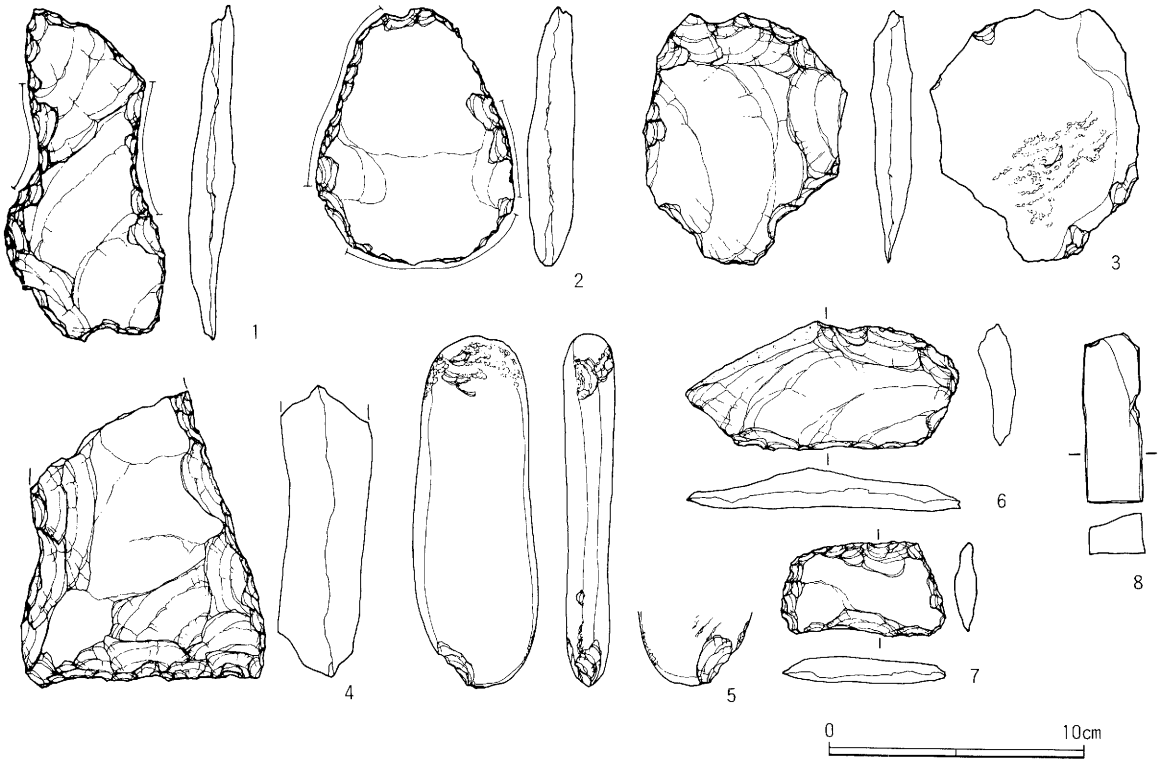
第７図28	A－７	Ⅰ－４－A－①	口縁部	A．低い貼付隆帯が弧状、波状のモチーフで数条施文、隆帯上、器面に貝殻条痕、斜位、口唇部貝殻腹縁のキザミ	A．指圧整形後ナデ整形で平滑・B．横位指圧整形痕数段小さな凹凸	白色、雲母細粒子・良好、堅緻・黒茶灰褐色
29	A－８	Ⅰ－４－A－②	胴　部	A．低い貼付隆帯横位、隆帯上斜位キザミ	A．指圧後ナデ整形で平滑・B．指圧整形痕で小さな凹凸	白色粒子・良好・黄茶褐色
30	A－８	Ⅰ－４－A	胴　部	A．低い貼付隆帯横位数条剝落	B．指圧整形痕で小さな凹凸	白色細粒子・良好堅緻・黒茶灰褐色
31	A－８	Ⅰ－４	胴　部	A．貝殻条痕、縦位	A．条痕により平滑・B．指圧整形痕で小さな凹凸	白色粒子、若干の雲母細粒子・良好堅緻・黒灰色
32	B－７	Ⅰ－４	胴　部	A．貝殻条痕、縦位	A．条痕により平滑・B．指圧整形痕で小さな凹凸	白色細粒子・良好・茶褐色
33	A－７	Ⅰ－４	胴　部	A．不鮮明な貝殻条痕、斜位	A．条痕により平滑・B．指圧整形後軽いナデで小さな凹凸	白色細粒子・良好堅緻・黒茶褐色
34	A－２	Ⅰ－４	胴　部	A．不鮮明な貝殻条痕、斜位	A．条痕により平滑・B．指圧整形後軽いナデで小さな凹凸	白色粒子・良好・茶褐色
35	A－７	Ⅰ－４	胴　部	A．不鮮明な貝殻条痕、斜位	A．条痕により平滑・B．指圧整形後軽いナデで小さな凹凸	白色、雲母細粒子・良好、堅緻・黒茶灰褐色
36	A－７	Ⅰ－５	胴　部	B．軽い擦痕状の条痕、斜位	A．軽いナデにより平滑・B．指圧整形後条痕	白色、石英細粒子・良好・黄茶褐色
37	B－５	Ⅰ－５	胴　部		A．ナデ整形・B．指圧後ヘラ状工具にナデ、ナデ痕が擦痕状	多量の長石粒・良好・赤褐色
38	表　採	Ⅰ－５	胴　部		A．ナデ整形・B．指圧後擦痕状の条痕	長石、石英粒・良好・黒茶褐色
39	A－７	Ⅰ－６	口縁部	A．口唇部下に半截竹管によるポジ状の隆起、２本一組結節状沈線波状施文、結節部は不鮮明、口唇キザミ・B．貝殻条痕	B．横位貝殻条痕	微量の繊維、白色岩石粉、黒色細粒子、良好・茶褐色
40	A－７	Ⅰ－６	口縁部	A．口唇部下に半截竹管によるポジ状の隆起、２本一組結節状沈線波状施文、結節部は不鮮明、口唇キザミ・B．貝殻条痕	B．横位貝殻条痕	微量の繊維、白色岩石粉、黒色細粒子、良好・茶褐色
41	A－７	Ⅰ－６	口縁部？	A．結節状沈線レンズ状構成施文、結節部は不鮮明		微量の繊維、白色岩石粉、黒色細粒子、良好
42	B－７	Ⅰ－７－A－①	口縁部	A．ＲＬ縄文、横位縦位回転方向変換による羽状構成、口縁は平縁でやや肥厚し、下段が稜状	B．ナデ整形による繊維痕の横位の動き	割合多量の繊維、白色岩石細粒・普通・茶黒褐色
43	A－８	Ⅰ－７－A－②	口縁部	A．ＲＬ縄文縦位回転、口縁は平縁でやや肥厚し、下段が稜状	B．ナデ整形	割合多量の繊維、白色細粒・普通・黒茶褐色
44	B－８	Ⅰ－７－B－③	口縁部	A．ＬＲ縄文横位回転、原体末端結節、口縁は小波状で肥厚	B．指圧整形痕をナデ消	繊維、白色細粒子、普通・淡黄褐色
45	A－７	Ⅰ－７－C－②	口縁部	A．ＬＲ縄文横位回転、口縁は小波状で波頂下に垂下肥厚部	B．ヘラによる横位ミガキ	割合多量の繊維、白色岩石粉、褐鉄鉱細粒子・普通黒茶褐色
46	B－８	Ⅰ－７－D－②	口縁部	A．ＬＲ縄文横位回転、口縁は平縁	B．指圧整形痕をナデ消	繊維、白色岩石粒子、長石粒子・普通・黄茶褐色
47	A－６	Ⅰ－７－　－①	胴　部	A．ＬＲ縄文、横位縦位回転方向変換による羽状構成	B．ナデ整形	繊維、白色岩石粒子、褐鉄鉱粒子･普通･赤褐色
48	B－８	Ⅰ－７－　－①	胴　部	A．ＬＲ縄文、異方向の斜位回転による羽状構成		繊維、白色細粒子・普通・赤茶褐色
49	A－６	Ⅰ－７－　－①	胴　部	A．ＬＲ縄文、異方向の斜位回転による羽状構成		繊維、白色岩石粒・普通・淡黄褐色
50	A－６	Ⅰ－７－　－①	胴　部	A．ＬＲ縄文、横位縦位回転方向変換による羽状構成	B．指圧整形痕を残し凹凸	繊維、白色岩石粒、普通、赤茶褐色
51	A－７	Ⅰ－８	胴　部	A．ＬＲ、ＲＬ縄文の軸巻原体回転、矢羽根状構成	B．ナデ整形	繊維、白色細粒子・良好・茶褐色
52	A－６＋５	Ⅰ－９	口縁・胴　部	A．口縁部下にタガ状の凸帯、１段撚糸４本揃え軸巻回転撚糸文斜位、口唇やや外反、砲弾形の器形	B．刷毛状工具による横位ナデ整形	多量の繊維、白色細粒子・良好・黒茶褐色

布は調査区内に於いてある程度の偏在性が認められ、調査区の西側A－7・8、B－7・8グリッドに集中する傾向が認められ、224点全体の71.3%がこの範囲に集中する。土器の集中する層位はⅢ層・Ⅳ層からで第1・2類はⅣ層に集中し、Ⅲ層には第3'・4・6・7・9類が包含され、この両者には若干の時間差があるものと捉えることができよう。

土器の出土状況を踏まえると検出された土器群は散在する傾向があり、台地北側傾斜面に廃棄されたものと考えられる。

時期について　今回検出された縄文早期末～前期初頭の土器群は遺構に伴出したものでなく一括性にかける。しかし、出土状況を考慮すると条痕文系を除いた土器群はある程度のまとまりを持っているものと考えられる。土器群内に絡条体圧痕を持つ土器がみられない点などは、この土器群の時間的位置ずけを明確にするものであろう。時期の位置ずけについては後章に於いて記述する。

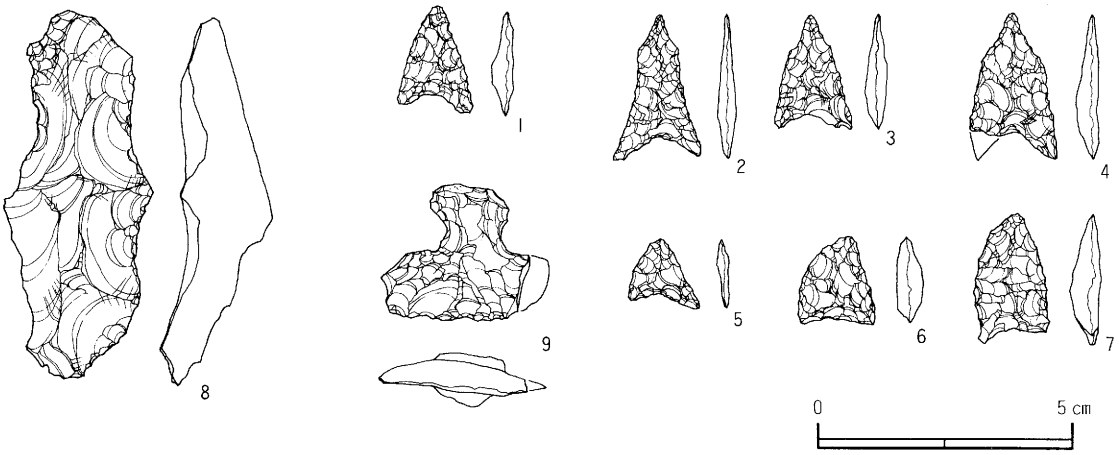
2．石器（第8図1～7、第9図1～9）



第8図　出土石器類1（1/3）

石器は50点が出土している。種類は打製石斧・礫器・横刃型石器・凹石・石鏃・石匙・石錐・剥片石器・ピエス＝エスキーユが検出されている。

石器の分類について　打製石斧は13点が出土している。形状が撥形や鍬形を呈しており、原材の自然面を残留している。2・4などにその傾向が顕著にみられる。打製石斧の様相は中期の打



第９図　出土石器類２（2/3）

製石斧と若干異なり、原材の形状を生かす点や、刃部を中心に調整が加えられている点などより礫器に類似している。石器ではないが、自然礫の面担面に格子目状のモチーフで沈線を有するものが１点出土している。

石鏃は11点が出土しており、検出された石器中の22％を占める。１点のチャート製を除き全て黒曜石製である。石鏃の中には先端に近い部分の側縁がやや突出する所謂５角形鏃がある。このような形状をもつ石鏃は縄文早期末～前期の遺跡を中心に検出されており、該期の特徴的な形態として捉えられている。

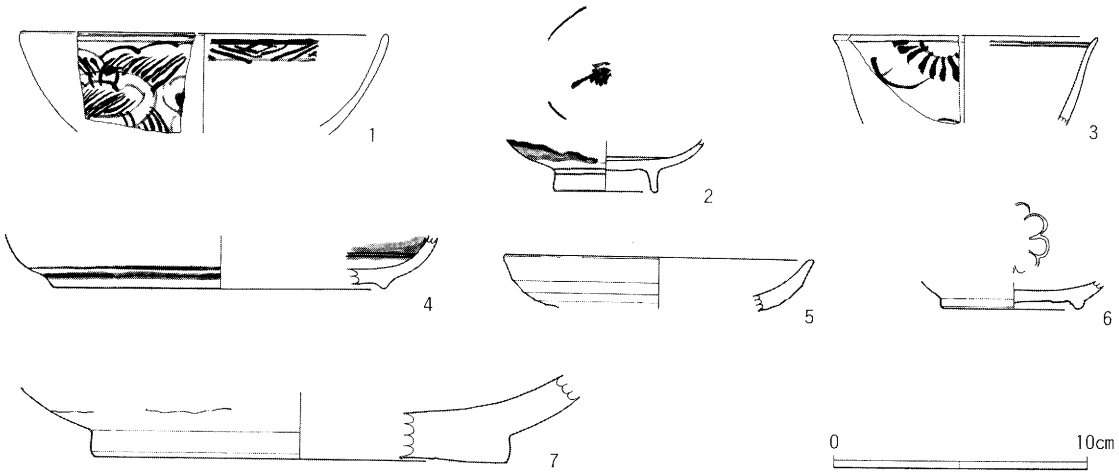
黒曜石を用いた石器・剥片・砕片・石核類は565点が出土しており総量で1450.6ｇを量る。特に砕片・剥片類は多く全体の93.6％を占める。剥片は様々な形状をなす不定形なもので、ポジまたはネガの主要剥離面を持っている。剥片の状況は素材を目的として剥離作業が行なわれているものは少なく、石器製作に関わってできた砕片・剥片の様相を示している。黒曜石の総量が多い点、石鏃のブランクと思われるものが11点出土している点などより、遺跡内で割合活発に石鏃等の黒曜石製石器の生産が行なわれていたことが窺える。

石器の石材について　石器に用いられている石材は黒曜石を除くと、西山山系よりと思われる緑色凝灰岩・輝緑凝灰岩等や、若干の安山岩などがある。特に緑色凝灰岩・輝緑凝灰岩等は遺跡周辺の河川に転石が見られ、遺跡内にこれらの剥片や砕片が散在することより、遺跡内でこれらの石材を用いた石器生産が行なわれていたことが窺える。

石器組成について　今回の調査により出土した石器の伴出関係は明確に把握し得てはいない。しかし、石器々種の出土傾向をみた場合、凹石の点数が少なく黒曜石・緑色凝灰岩・輝緑凝灰岩等の剥片・砕片や石鏃が多い点に特徴があり、遺跡内で石器製作の行なわれていた可能性も考えられる。遺跡内の石器組成の特徴的な傾向としては所謂生産具・凹石、磨石類の調理加工具が少なく割合貧弱で、石鏃等を中心とする狩猟具が主体をなすことが看取できた。

第２節　中世以降の遺物

中世以降に属する遺物は陶磁器類、金属製品、砥石が出土している。近世陶磁器の数点を除きそのほとんどが遺構に伴わず、所属時期を明確にすることができなかったが、遺物の属性より中世・近世後半に大別することが可能である。



第10図　近世陶磁器（1/3）

１．中世の陶磁器

中世の陶磁器と判明したものはかわらけ・内耳土器・灰釉陶器皿・鉄釉陶器**椀**があった。これらは全て細片のため器形を窺えるような資料はなかった。尚、その他に平安時代の灰釉陶器**椀**・蓋の破片が出土している。

中世陶磁器類は調査区の西半分に散在し第Ⅱ層内より検出されている。これらの遺物より遺跡内に中世に何らかの生活の痕跡があったことが窺える。

２．近世の陶磁器類（第10図１～７）

近世陶磁器18点が出土している。陶器は**椀**・皿・甕、磁器は碗・皿の器種が認められた。全て破片のため全容を把握し得たものは少ない。磁器は呉須による藍染付がなされている。呉須の発色等より波佐見系と思われるものが若干数含まれていた。

出土分布は集石１・溝址１の周辺に若干ではあるが集中する傾向がみられた。

陶磁器の他に砥石（第８図８）、鉄製角釘１点が出土している。

第Ⅴ章　調査の成果と課題

第1節　芥沢遺跡出土の縄文時代早期末から前期初頭の土器群について

芥沢遺跡からは311点に及ぶ縄文時代早期末から前期初頭の土器群が検出されている。遺構等に伴出したものではなく一括性に欠除するが、若干の資料については層位的な関係も把握されており、ある程度の整理が可能となっている。また、近年該期の資料は量、質共に充実してきており、徐々にこの時期の土器群の様相が明確になりつつある。そこで今回検出された資料について若干の整理を加え、該地の早期末から前期初頭の土器の様相をまとめてみたい。

芥沢遺跡の土器群の構成

今回検出された土器を地文等により分類すると、条痕文系（貝殻・絡条体）、無文系、縄文系、撚糸文系、隆帯系、沈線文系、薄手指頭圧痕条痕文系、絡条体圧痕文系が認められた。その内容は他の遺跡の内容と類似しているが、細部に若干の差異がみられる。例えば絡条体圧痕文系が稀少である。第3類と分類した隆帯系の土器がみられるなどの点に特徴がある。これに加え条痕文系土器群は他の土器の下層より出土しており、上下関係を把握することができた。

このような状況を踏え土器群の構成を考えるが、特に在地系と思われ口縁形態が時間幅の中で変遷することが明確になりつつある縄文施文尖底土器を中心に早期末から前期初頭の土器群を構成してみたい。

県内に於ける縄文施文尖底土器群の変遷について

縄文施文尖底土器群は特徴的な口縁形状をもち、それがある程度の変遷をたどることが明確になりつつある。（児玉、1984・1987）（守矢、1989）そこでこの土器群を中心に比較的編年関係が整理されている東海系の土器群との伴出関係を踏え第2表を作製した。それによると縄文施文土器群は早期末の割合幅広い時期に亘って存在している。特に量的には石山式から類例が増加し、塩屋（木島Ⅲ）式に至っては主体を占めるようになることが明確となった。その中で口縁部形態が変遷していることが把握できる。

口縁部の特徴を分類すると、A_1・平縁で口縁部下にタガ状の貼付隆帯を有する。A_2・平縁で口縁部下に逆T字形構成の貼付隆帯をもつ。A_3・平縁で口縁部下に庇状の低い凸帯状の隆起を有する。B_1・口縁が小波状を呈し、波頂下に逆T字形構成の貼付隆帯をもつ。B_2・口縁が小波状を呈し、波頂下に三角形構成の貼付隆帯をもつ。B_3・口縁が小波状を呈し、肥厚化をする。波頂下に垂下肥厚部を有する。C_1・平縁で口縁部が肥厚化する。D_1・平縁で口縁部は肥厚化しない。以上のように分類することが可能である。これを伴出している東海系土器とみると、石山式・天神山

式頃に口縁部に貼付隆帯をもつ群（A_1・A_2・B_1・B_2）が出現する。これらの群の隆帯上には篦状工具によるキザミや絡条体圧痕等が施される。これが塩屋（木島Ⅲ）式にはA_3・B_3・C_1の群に変化し、塩屋式以降ではC_1・C_2の単純なものにと変化するようである。このような状況を踏え芥沢遺跡の土器群の位置付けを行ないたい。

芥沢遺跡の土器群の位置付け

芥沢遺跡より出土した土器群特に縄文系の土器群については、その口縁形状がA_3・B_3・C_1が認められた。伴出する土器も塩屋（木島Ⅲ）式を中心とすることより該期に帰属するものであろう。第３類とした神ノ木台式は梨久保遺跡第75号住居址で天神山式や絡条体圧痕文系土器、縄文系A_1・B_2の口縁形状の土器群と共伴しており、やや本遺跡の土器の構成とその様相を異にしており、第３類は若干の幅の中に包括されるものであろう。

条痕文系土器については、他の土器群と層位的に分離でき得る可能性が把握されており、縄文系等の土器群の前段に位置する一群であると予測でき得る。条痕文系土器の特徴を概観した場合、条痕施文具が貝殻によると思われるものは稀少で絡条体条痕文系が主体を占める点、また、条痕が表面だけに施されるものが全体の89％を占めることなどを考慮するとより後出の条痕文系であると思われる。

第２表　県内に於ける縄文施文尖底土器群の変遷

土器群 / 遺跡名	縄文系								条痕文系	隆帯系	絡条体圧痕文系	撚糸文系	東海系等					
	A1	A2	A3	B1	B2	B3	C1	D1					石山式	天神山式	神ノ木台式	下吉井式	塩屋式	塩屋式以降
膳棚B　1号住居											○	○	○					
梨久保　9号住居	○												○					
梨久保　23号住居	○	○						○			○	○	○	○				
梨久保　75号住居	○				○						○		○	○	○			
北高根　A10号住居	○													○	○		○	
梨久保　2号住居	○	○				○						○						
芥沢			○			○	○			○	△	○			○	○	○	
高風呂　集石5			○			○	○	○		○		○				○	○	
高風呂　集石4			○			○	○	○		○		○				○	○	
宮の原　7号住居								○				○					○	
中道　SB6号住居			○				○			○		○						
中道　SB9号住居			○			○	○	○				○						
駒形　1号住居						○	○											○
高風呂　8号住居							○	○				○						○
高風呂　23号住居							○	○				○						○
高風呂　30号住居							○	○				○						○
高風呂　46号住居							○	○				○						○
高風呂　50号住居								○										○

以上のような点を考慮して本遺跡の土器群の位置付けを行うと、梨久保遺跡の報告中で行われた３期の区分（小沢、1986）のⅠ期　より早期的な様相を示す条痕文系の土器群と絡条体圧痕文系土器の一部より構成される一群、Ⅲ期　花積下層期の様相の強い羽状構成や菱形構成等の縄文を多用する一群に比定でき得る。尚、本遺跡の縄文系の土器群は共伴関係をもつ他の土器群との

様相よりⅢ期でも早い段階に帰属するものであろう。

昭和28年に藤森・戸沢両氏の調査時に検出された土器群は縄文系、撚糸文系、隆帯文系、沈線文系、薄手指頭圧痕条痕文系等があり、今回の調査により検出された土器群と同様な構成を示している。しかし、縄文系の口縁部形態には今回の調査では認められなかったA_1、D_1 2つの口縁部形態が認められており、A_1がかなりの段階まで続くことが理解できる。

これらの点より縄文施文尖底土器群の口縁部変化を段階的にたどると、第1段階　口縁部にタガ状等の貼付隆帯をもつ。第2段階　貼付隆帯はなくなり、口縁部下が肥厚化し垂下肥厚部等との組み合わせをもつ。第3段階　第2段階のような垂下肥厚部はなくなり、平縁で肥厚口縁となる。以上のような3段階が想定でき、今回得られた資料は第2段階に帰属する一群である。

今回検出された資料は遺構外からの検出で共伴性に問題があるものの、ある程度の段階内に包括でき得ることが示された。今回の調査が遺跡内の廃棄の場と思われる一部を調査しただけで、遺跡全体の様相について把握することはできなかったが、本遺跡は縄文早期末から前期初頭を考える上に貴重な遺跡である点を再認識し得た。

参考・引用文献

長崎元廣、他　1983　「地域別報告(6)長野県」『縄文時代早期末・前期初頭の諸問題』神奈川考古第17号
宮坂虎次、他　「縄文時代、守屋・入笠山麓の遺跡」『茅野市史上巻』茅野市教育委員会
児玉卓文　1983　「縄文時代の遺物土器」『長門町六反田』長門町教育委員会
児玉卓文　1984　「結語」『長門町中道』長門町教育委員会
守矢昌文　1986　「高風呂遺跡出土縄文土器の分類と変遷」『高風呂遺跡』茅野市教育委員会
児玉卓文　1987　「研究動向Ⅱ長野県」『縄文前期の諸問題』群馬県考古学研究所
守矢昌文　1989　「長野県における縄文時代早期末から前期初頭の土器群について」『会報No.3』諏訪考古学研究会
小沢由香利　1986　「縄文時代早期末～前期初頭土器の分類と検討」『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会

第Ⅵ章　結　　語

芥沢遺跡は早くから知られた遺跡である。特に昭和28年には藤森栄一・戸沢充則氏によって初めて発掘調査され、縄文早期末から前期初頭の土器群の出土と竪穴住居址の存在が確認されている。今回の調査は遺跡北縁の限られたごく狭い範囲であり、縄文時代の遺構は検出されなかった。しかし、藤森・戸沢両氏の発掘で得られた土器と同じ時期の土器が出土し、それらの土器群の編年的位置や系統関係の問題について、内容を充実させることができたことは大きな成果であった。もう１つの成果は、資料的にまだ不十分ではあるものの、芥沢遺跡から発見される石器類のあり方について、今まで言われてきたような点を具体的に指摘できたことである。その１点は、石鏃と黒曜石の量的な多さの傾向についてである。そしてもう１点は、諏訪地方ではごく一般的に使われている、打製石斧や磨製石斧の石材である緑色岩類の剝片類が多いということである。このうち石鏃と黒曜石に関しては、宮川とのつながりが比較的強い、狩猟や漁撈が生業活動の中心であったことを、一面では示すものであろう。また、緑色岩類の剝片類の多さについては、金沢地区が入笠山系に産する緑色岩類の豊富な土地であることから、発掘調査が進めば、おそらくある種の石器の生産を示すような痕跡が発見されるのではないかと推察されるのである。

南アルプスの北端に位置する入笠山から北西へ続く急峻な地形の金沢の山と、東に対峙する八ヶ岳山麓台地との間を流れる、宮川の狭い谷沿いの地形が中心となる金沢地区の縄文時代の遺跡は少ない。そのなかでは、比較的ゆるやかな起伏で広がる丘陵地帯である、中野沢川と金川が流れる金沢仲町の裏から大沢にかけての一帯は、芥沢・はごや・向坂・天狗山の４遺跡が比較的至近の位置に集中し、１つの遺跡群を形成している場所である。発掘調査が進んでいないので詳しいことはわからないが、いくつかの記録からは、これらの遺跡が縄文時代早期から中期にかけての遺跡であることがわかる。つまり、縄文時代の遺跡の少ない金沢地区では、この一帯が伝統的に縄文人の生活の中心的な場所であったということである。

芥沢を中心とするそれら４遺跡の性格はまだ明らかでないが、遺跡の営まれた場所が、諏訪盆地と山梨方面を結ぶルート上に位置していることは注目すべき点である。また、丘陵地帯の西側を北流して宮川へ入る金川は、芝平峠を越えて山室川の渓谷を下り、伊那谷方面とを結ぶ交流路の役割をもっていたことも考えられる。諏訪盆地と山梨方面、また伊那谷と八ヶ岳山麓とを結ぶ十字路となる場所で、交通上の中継点となるような役割を果たしていたとみられる点も、これらの遺跡の性格を考える上に、付記されるべきことではないかと思われるのである。

発掘調査関係者名簿

1．金沢芥沢遺跡調査団

調査団長　小島与四男（茅野市教育長　9月30日退任）

両角　昭二（茅野市教育長　10月1日着任）

調　査　員　鵜飼　幸雄（茅野市八ヶ岳総合博物館学芸員・日本考古学協会員）、守矢　昌文（茅野市教育委員会学芸員・日本考古学協会員）、小林　深志（茅野市尖石考古館学芸員）

会計監事　伊藤　　勝（茅野市財政課長）

発掘参加者　小松とよみ、関　　喜子、武居八千代、原　　敏江、矢嶋恵美子

2．事　務　局

事務局長　宮坂　和茂（教育次長）

事務局課長　長田　　篤（生涯学習課長）

事務局係長　岩波　吉春（社会教育係長）

事務局員　守矢　昌文、五味　健志（社会教育係）

1．遺跡遠景（北方向から）

2．調査区全景（東方向から）

芥　沢　遺　跡

——— 諏訪南インター林間工業団地上水道施設用地
に係わる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ———

平成２年１月25日　印刷
平成２年１月31日　発行

編　集　長野県茅野市塚原２丁目６番地１号
発　行　茅野市教育委員会

印　刷　ほおずき書籍株式会社